

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 小澤 裕之

本論文は、ロシア・アバンギャルドと総称される前衛文学・芸術運動の最終的な局面を担った詩人・小説家ダニイル・ハルムスの創作の変遷を追いながら、その手法と詩学を分析したものである。ハルムスおよび彼が所属した前衛グループ「オベリウ」は1930年代以降ソ連では活動できなくなり、その後長いこと完全に忘れられていたが、1970年代にまず欧米で本格的な評価が始まり、ペレストロイカ後にはソ連でも再発見されて大きな話題となった。それ以来、ロシア本国でも欧米でも膨大な研究が積み重ねられて現在に至っている。しかし日本ではハルムスの創作の全体を扱い、彼の特異な手法と詩学を統一的な視点から分析した研究はまだなかった。そういった状況の中で、本論文は日本における初めての本格的なハルムス研究の博士論文である。

論文は全5章から構成されている。

第1章では、本書を貫く主題となるザーウミ（ロシア未来派の提唱した「超理知言語」）について、音声的な実験を通して作られる新造語による「音のザーウミ」と、既存の単語の非慣習的な組み合わせによる「意味のザーウミ」が区別され、初期のハルムスが未来派の影響下に「音のザーウミ」から出発しながらも、次第に「意味のザーウミ」に移行していったことが示される。第2章は、ハルムスの代表作の一つとして知られる戯曲『エリザヴェータ・バーム』を取り上げ、源泉となった様々な題材との関係を詳細に分析する一方で、この作品が「音のザーウミ」との決別を示すものになっていることを論証している。そして第3章では『報復』と『フニュ』という2編の劇詩に即して、ハルムス独自の詩学の構築の様相が分析される。第4章と第5章は、後期のハルムスの散文作品を扱う。ここで追究されるのは、「音のザーウミ」を脱したハルムスによる新たな「意味の構築」への過程であり、作品集『出来事』や短編『老婆』の詳細な分析に基づいて、ハルムスが人間の理知を超えた領域の探求をいかに行っていたかが示されている。

先行研究ではハルムスの生涯の軌跡は、未来派的なザーウミから出発し、社会風刺の意図を秘めた不条理作家に変貌したと捉えられることが多かったが、本論文はハルムスがザーウミという手法を理念の次元で一貫して発展させていったことが論証されている。その主張は一次資料や先行研究の徹底的な調査と作品テキストの緻密な分析に支えられており、独創的であると同時に十分な説得力を持つものになっている。本論文はハルムスの詩学に研究の視野を限定したために、未来派全体のコンテキスト、スターリン時代ソ連の社会的背景、さらには20世紀前半の西欧の前衛との照応関係など、捨象された重要な側面が少なからずあることは確かだが、ザーウミを一つの軸としてハルムスの生涯と詩学を包括的に描き切ったことの先駆的な学術的価値は極めて高い。それゆえ、本論文は博士（文学）の学位に値する優れた研究であると、審査委員会は全員一致で評価した。